

第5章 本研究のまとめと将来性

第5章 本研究のまとめと将来性

2000年から2001年にかけて、米国を中心にITバブルが起こった。基幹回線の光ファイバ化がすさまじい勢いで進み、光通信産業は、空前の活況を呈した。しかし2001年を終えることから仮想需要に踊らされた通信インフラへの過剰投資が目立つようになり、一挙にバブルが崩壊したことは周知に事実である。その後、通信不況が続いている。しかしインターネット加入者は、増え続けており、また扱う通信量も年率2～4倍の伸びを現在も示している。インターネットの加入者が増えることはもちろん、1加入者あたりの通信容量の飛躍的な成長である。すなわち、ADSLを代表とするブロードバンド広帯域サービスが普及してきた。さらに、光ファイバが各家庭に導入される数も2003年後半から著しい伸びを示している。2004年3月末では、100万加入は確実であると期待されている。しかし、光ファイバを家庭に導入するための工事方式やそれを扱う技術者の数は決して満足できる状態ではない。数年前の幹線系を中心とした光ファイバ通信ブームに比べると、現在は加入者系やLAN系と言われる末端需要が着実に成長しているのである。言い換えれば、この末端需要にこたえられる技術や人材が不足していると言ってよい。通信不況の影響と低コスト、短期間工事と言うこれまでにない技術技能が要求されているからである。

当機構は、数年前から光ファイバ施工技術を取り上げ、技術者、技能者の養成を早い段階から実施して来た。その結果、幹線系の需要増に対して社会的なニーズに貢献してきた。しかし、今後は、加入者系、LAN系の施工技術の普及に取り組まなければならない。そこで、今回の調査目標として、ブロードバンド通信用技術の訓練コース開発を取り上げた。LAN系技術、現場に即した工事法、光ファイバ導入後の測定評価検査などについての訓練コースである。特に、実際に現場を持っている企業の技術者を中心に調査委員会を組織し、かつ東京校での事前の研修実施など、実践的なコース開発を試みた。また、教材は、e-Learningのプラットフォームを使って、講師側の研修用補助教材として有効に機能することを狙った。

今回作成した教材、テキストを補助教材として、提案したブロードバンド通信施工技術コースを立ち上げれば、今後飛躍的に増加するであろう加入者系の光ファイバ施工工事が出来る実践的な現場技術者を訓練育成できると考えている。e-Japan構想で謳われている、“2005年度中に光ファイバ加入者数1000万世帯”を実現するための重要な支援策になるであろうと期待している。

参考文献

- 1) 総務省：情報通信白書
- 2) 加島宣雄：光通信ネットワーク入門，オプトロニクス社
- 3) 菊池拓男・西澤紘一：光ファイバ施工技術，オプトロニクス社
- 4) スターリング：光ファイバネットワーク技術解説，ソフトバンク社
- 5) 職業能力開発総合大学校能力開発研究センター編：応用短期過程モデル教材 - 実務者のための光ファイバ通信コース - ，教材情報資料 No.99 ，(2002)
- 6) 職業能力開発総合大学校能力開発研究センター編：応用短期過程モデル教材 - 光通信主任技術者演習 - 及び - 光ファイバ施工技術手順書 - ，部内資料NO.18 ，(2003)